わたしの聖戦（ジハード）

◎◎女性が働くということ◎◎ 70

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津江

「待つ」ということ

日本は災害が多く、「天災は忘れた頃にやって来る」の名言どおりの国だ。

ときに、通常はほとんど時間差なく走る列車が、突然止まったり大幅に遅れたりする。天災のために、せっかちかつ几帳面で知られる日本の人々がやむなく「待つ」事態に陥るのは珍しくなく、乗り継ぎや大切な予定があったとしてもこればかりはどうしようもない。

考えてみれば、利便性が高まるにつれ、ますます私たちは待てなくなっている。乗り物はもちろん、信号もレジもレストランでも、「早い」ことの価値は高く、「遅い」反応は許しがたくなっている。要は「せちがらい」世の中になったのだ。

「待つ」心境は悪くない。万一それで大事な人の死に目に会えなかったり出世に悪影響があったりしても、自分の責任ではないのだから、開き直ってしまえばもうあとはずっとラクになる。その悟りにも似た気持ちになるまでが大変だが、いずれにしても自力では解決できない点に違いはなく、あきらめるしかない。

思いがけなく待つ時間ができると、普段は考えないようなことが頭に浮かぶ。いつまで待てばいいのだろうと不安な気持ちが落ち着けば、色々な余裕が出てくるものだ。特にひとりで移動しているときには、急に手持ち無沙汰になるものの、外をぼんやり眺めたり、周囲の人々を観察できたりする。読みたかった本を一気に読破することもあれば、ゆっくりビールでも飲みたいと思ったりもする。もし携帯電話もつながらないような場所であれば、さらにいい。一切の連絡が取れないという状況は、たくさんの時間をプレゼントされたような、得をしたような、そんな風にとらえることもできるのだ。

実際、新幹線に3時間ほど閉じ込められたことがあるが、当然ながら最初はほぼ全員が困惑し、あわてて携帯電話で連絡をとり、車掌に詰め寄る人があったりする。しかし、そのうちあきらめ顔になり、車内販売のカートがほとんどが空になり、車両全体が居酒屋と化してしまった。つい見知らぬ周囲の人と声を掛け合ったり、互いに苦笑交じりに視線を交わすようにもなる。

ようやく新幹線が動くというアナウンスを耳にすると、ホッとするとともにちょっとだけ寂しげな、今置かれている空間が急に惜しいような表情をする人もいる。これでまた煩わしい世の中に身を置くことになるのかとうんざりするのかもしれない。突然の「待つ」時間がひとときの癒しになることもあるらしい。

「鳴かずんば…」で始まるほととぎすの有名な句は、信長・秀吉・家康の性格の違いを表す例として、それぞれ次のように続くのはあまりに有名な話。つまり、信長は「…殺してしまえ…」、秀吉は、「…鳴かせてみせよう…」、そして、家康が「…鳴くまで待とう、ほととぎす」である。

後世の作り話とはいえ、よく出来ている。3人とも魅力的ながら、ここは「待った」ほうが勝ちとの印象が強い。家康にならって、待つ心境を楽しむ余裕こそ今の私たちには必要かも。やむなくできた待ち時間が貴重なものに思えてくるほど、現代は息苦しい世の中になってしまったのだから。

イラスト・三浦義雄